
夢から醒める七日間

トイレ総理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢から醒める七日間

【Nコード】

N3942W

【作者名】

トイレ総理

【あらすじ】

「今日から一週間、ラビのことを監視してほしいんだ」
トワ・クリキは自らが所属する麻薬密売組織のボスに、奇妙な命令を下される。それはボス自身の愛人である女・ラビの監視であり、ビデオカメラを用いて四六時中撮影することだった。

舞台は、スラム街シクロ。治安や衛生状態の劣悪さから、政府によって解体されることが決定している。

強制退去期日まで残り一週間を切った今、未だにこの街に残り続け

る人間の多くは、現実を直視できない人間だった。
トワもそんな一人であり、終わりを知りながらこれまでと同じ日々
を繰り返そうとする。

一日目(1)

夢を見ていた。

耳から捻じ込まれて、ぐるぐる回りながら脳を犯すのは、女たちの甲高い声。どぶを思わせる腐敗臭が執拗に鼻腔を撫で、過剰な湿度を含んだ空気が皮膚に纏わりつく。

重く淀んだ暗がりの中で、何かが蠢いているのが薄らと見えるが、その輪郭さえ判然としなかった。

目を凝らしながらふと、自らの口許に粘性の液体が付着しているのを感じて、舌先で舐め取る。苦い。だが、それが間もなく眩暈するような甘さへと変化することを、すでに予感していた。

緩やかに押し寄せるその時を思い、呼吸が震え、指先が微かに痙攣する。強烈な甘さにまみれば、女たちの嬌声も、腐った異臭も、蠢く影の存在も、きつと瞬く間に快感へと変わるだろう。

だが、そんな夢もやがて醒める。

トワはまどろみを引きずりながら、横たわっていたソファからゆっくりと上体を起こして、テーブルの上のコップを手に取った。

半分まで注がれた水は、昨日飲んだものの残りだったが構うでもない。一気に飲み干してなお体は水分を欲しているが、全身が重く、部屋の外まで水を取りにいく気にもなれなかった。

R-129を摂取したあとは、いつも口の中がひどく乾く。

周囲を見渡すが、眠りに落ちる前と何ら景色に変化はない。

錆びたルーレットと、レバーが下がったまま動きを止めたスロット。ダーツボードに刺さった矢は、何ヶ月も前から同じ位置にある。古びた賭博場には、カビと埃の臭いが漂っていた。トワ以外に人影はなく、静まり返っている。

古ぼけた賭博場に見せかけた、トワの所属する組織の本部だった。R-129をはじめとする大量の麻薬が保管された倉庫もある。組織の名はコクハツと言った。

トワは丸二日間、ここでの警備を命じられていたのだが、実際にはそのほとんどの時間を、Rを用いたトリップに費やしている有様だった。腕時計を見やれば、今も三時間程度はRによる夢の世界へ没入していたことになる。

Rはコクハツの重要な収入源であり、トワはその売人だが、日頃から組織の目を盗んでは横領していた。トワは十七歳で、コクハツに所属してから二年ほどが経過している。

トワがふと、部屋の向こうに人の気配を感じて扉を見やると、間もなく軋んだ音を立てて扉が開かれる。奥の廊下から現れたのは組織の同僚だった。トワよりもいくらか年上の同僚は、いかにも目を覚ましたばかりといった様子のトワに苦笑する。

「ちゃんと仕事やれって」

「こんな状態じゃ何やったって無駄だろ」

「まあね。間違いない。ちょっと言ってみただけだよ。仕事熱心な同僚としてさ」

同僚がそう言って肩を竦めると、耳にいくつも付けられたピアスのチェーンが大袈裟に揺れた。トワはこの男がまともに仕事をしているところを見た例がない。賭博場の隅にある空き部屋に、いつも適当な女を連れ込んでいるような男だった。

もっとも今この組織に所属する人間でまともな者など、もはや皆無に等しいのだが。かつては五百名にものぼった組織員だが、この一年でわずか五十名ばかりへとその数を減らしている。すでに組織として破綻しており、正常に機能していない。

あと七日でこの街は終わるが、コクハツが街の外へ出てなお存続できるだけの余力を持ち合わせているはずもなく、自然消滅するの

は目に見えていた。

「とは言っても、最低限のルールとマナーは守っておいた方が身の為だとは思うよ。あんまりRを盗んでばっかりいるとき」

「俺は盗んでない」

嘘だとすぐに見抜かれる嘘を、見抜かれるとわかっていて吐く。すると同僚は笑いながら告げた。

「ボスが呼んでるよ。私室にいる。ばれてなきやいいな」

一瞬、言葉の意味が飲み込めない。組織員のうちでも最も末端に位置しているトワを、ボスが直々に呼びつけるなど、これまでにならないう事だった。組織が破綻しているとはいえ、上下関係は未だ廃れていない。

「まあ何の用があるのか俺が聞いたわけじゃない。俺の勝手な予想さ」

だがトワとしてもそれくらいしか考えられないのが実際のところだった。

トワがため息混じりにソファから立ち上がって、ボスの私室へと足を向けると、同僚はその潔さに冗談じみた歓声をあげた。状況を楽しんでるのは明らかだった。そんな同僚を押しつけて、トワは部屋を出る。

数ヶ月ほど前、Rを横領して無断で売り捌いていた組織員がボスに殺されている。

トワの場合、横領したRはあくまで自分が楽しむために使うのみであり、先の例に比べればその悪質さの度合いとしては軽いとも言えるが、横領が重罪であることに変わりはなく、それなりの報復を

受けるのは確実だった。

ボスの私室へ向かう足取りは重いものの、トワ自身どこか他人事のようにも感じていた。現実感が欠落しているのはいつものことだったが、最悪命を奪われる可能性さえ孕んだ状況に置かれてなお、実感が薄いことには我ながら苦笑するほかない。

「今日はひとつ、お願いしたいことがあって、呼んだんだ」

若干二十四歳にしてコクハツのボスであるカナタ・ネコは、精神的な疾患を抱えており、それはこの組織に関わる人間にとっては周知の事実だった。

か細い声でトワを呼ぶカナタの、その眼差しは虚ろで焦点さえ定まらない。所在無くトワの顔の上を彷徨っている。いかにも繊細そうなの、整った顔立ちと華奢な体つきは、ほとんど女にさえ見えた。

簡素な執務机と椅子が置かれたカナタの私室は、床一面に書類が散乱し、切れかけた蛍光灯が時折明滅していた。足の踏み場がなく、トワは重なり合った書類の上へ足を置かざるを得ない。

「トワ・クリキ君、だったよね。これから一週間、ラビのことを監視してほしいんだ」

机の上に腰かけて、子どものように落ち着きなく足を揺らしながら、カナタはトワに告げた。全く想定外の言葉に、トワはまるで事情が飲み込めない。どうやらR横領について呼び出されたわけではないようだが、そのことに安堵する間もなかった。

カナタが指差したのは、机の側面を背もたれにして床に座り込んでいる一人の女、ラビだった。

栗色の長い髪が俯いた彼女の頬にかかり、その顔をすっかり

隠してしまっている。くたびれた白いワンピースに身を包み、露出された腕や足は今にも折れてしまいそうなほどに細い。

トワはこうして彼女と間近に顔を合わせるからこそ初めてだが、幾度かカナタと一緒にの場所を見たことがあった。彼女はカナタの女として組織内でも名の知れた存在だったが、黙ったままカナタの足元にしゃがみ込むその姿は、恋人だとか愛人だとか言うよりもペツトに近いように思われた。

「僕は今からしばらくこの街を離れるんだ。でも一週間後にまた戻ってくる。それまでの間、君にラビの監視をお願いしたいんだ」

なぜ自分の女を監視させる必要があるのか。全く理解できないながらも考えを巡らすトワを他所に、カナタは一方的に続けた。

「これがビデオカメラ。四六時中、これで彼女を記録して。朝も昼も夜もずっとね。メモリーカード一枚で二十四時間撮影できる。予備も含めて全部で十枚渡しておくから」

カナタは机の上に置かれていたビデオカメラとメモリーカードを携えて、トワの前までやってくると、強引に手渡した。メモリーカードの何枚かが床に落ち、そのうちの一枚をカナタは誤って足で踏みつけていたが、彼自身全く気付いていないようだった。

「引き受けてくれるよね」

「あの……監視を、ですか」

「そうだよ。ラビのことは基本的に、自由に行動させてくれて構わない。この街の中であれば、ラビの行く先々に君はついて行って、ビデオカメラを回してくればいい。但し、もしラビが逃げ出しそうになった時は止めてあげてね。力づくでもいいから」

そこまで言うと、カナタはトワに背を向けて、ラビの隣にしゃがみ込む。彼女の頭を撫でながら、

「ラビ、ねえラビ。僕がおでかけしている間、大人しくしていてね。そうしたら僕がこの街に戻ってきた時、ご褒美にいっぱい抱きしめてあげるから」

ひどく優しげな口振りで言うのだが、ラビは俯いたままわずかに顔を背けるのだった。二人の関係が良好であるようには見えない。

「ラビ、僕のかわいいラビ、トワ君と仲良く、いい子でね。僕の帰りを待っていてね。僕から逃げないで。約束だからね」

ラビの頬に口づけたあとで、カナタは彼女の頭を腕で包み込むように抱きしめると、小さく嘆息しながら目を閉じた。カナタの細い指と、その間を流れるラビの痛んだ髪に視線を落としながら、トワには口を挟む余地もない。

このボスも、かつてはまともで頭の切れる人間だったと聞くが、今では見る影もない。三年ほど前に組織内部で勃発した後継者争いによる過度のストレスから、精神不安に陥ったらしいが、当時まだコクハツに所属していなかったトワにはその詳細は不明である。

「もう行かなきゃ」

やがて不意にカナタは立ち上がると、手荷物ひとつ持たずに部屋の入り口へと向かう。トワとすれ違い様にカナタは言った。

「君が引き受けてくれて本当に良かったよ。一週間、ラビのことをよろしくね」

引き受けるもなにも一切返事をした覚えはないのだが、当然のように監視させられることとなっている。もちろんボスを前にその命令を退けられるわけもないのだが、軽い混乱からトワは思わずカナタを呼び止めた。次の瞬間、トワは自らの喉元に冷たい感触を覚えることとなる。

銃口だった。カナタの指先が引き金にかかっている。その時はじめて、カナタと視線が交わった。

「僕の言いつけを守るなら、Rの横領については目を瞑ってあげてもいいんだよ。わかってるよね」

銃によって殺意を表しながらも、感情が根こそぎ抜け落ちたようなその眼差しには、ただ空虚さと冷たさばかりが張り詰めていた。トワは途端に言葉を失う。喉を潰された心地がしたのは、突きつけられた銃よりも、ほとんど狂気さえ滲ませたその双眸によるところが大きかった。トワはひとたび唾を嚙下する。

「わかってくれるならいいんだ」

カナタは銃口をトワから外して懐にしまつと、死んだ目で微笑んだ。すでに、これまで通りの焦点の定まらない眼差しに戻っていた。カナタはそのまま歩みを進め、扉を開けると、そこで不意に足を止める。

「それからひとつ、どうしても守ってもらいたいことがあるんだ。もしソウエって男が現れても、ラビのことは絶対に渡さないで」

言い残してカナタは部屋から去った。小さな音をたてて扉は閉まり、トワはラビと二人きりで部屋に残される。

事情の不可解さと想定外の展開に、トワは未だこの状況を受け入

れきれない。静まり返った部屋の中で、床に座り込んだままのラビを見下ろしてはみるものの、居心地の悪さに堪え切れず視線を逸らし、その次の瞬間だった。

「あなた、カメラの使い方はわかる？」

ラビがはじめて口を開いた。視線を戻すと、彼女はトワを真っ直ぐに見上げている。

「あ……ああ、使い方」

ラビはすつと立ち上がると、トワの傍へとやってきた。無造作にカメラを取り上げて、ひび割れた爪のその先で躊躇いもなく電源を入れる。電子音がカメラのオンを告げた。

「どうぞ」

物憂げだが良く透る声で言って、ラビはトワにカメラを手渡した。トワは妙な緊張感を覚えながら、口の中だけで中途半端な返事をして、促されるままにカメラを構える。カメラが放つ微かな熱を手のひらに感じながら、レンズ越しにラビを覗く。

彼女は化粧気がなく、薄い眉の、そのままの素顔をさらしていた。肌は病的なまでに白く、ほとんど血の気が失せている。傷みの目立つ栗色の髪はゆるやかなウェーブがかかっており、腰のあたりまで長く伸ばされていた。あまりに華奢で骨ばった体つきは見ていて痛々しいほどだった。

不意に、ファインダーの向こうでラビが、ほんのわずかに微笑んだ。

「そんなに緊張しないで。こんな監視は、はじめてではないの」

落ち着いた声音だった。トワを安心させようとしたのかもしいない。

目鼻立ちが整っているわけではないし、どこかやつれているような雰囲気さえ漂わせているが、それでも妙な女らしさと柔らかさをそなえている。トワはそんな印象を抱いた。

年齢は良くわからないが、自分より年下ということはないように思われた。だが、それでも大した年齢差ではないだろう。二十歳にはまだなっていないかもしれない。

「それじゃあ」

ラビはあくまで穏やかにトワへと告げた。

「はじめましてよう、わたしの監視を」

一日目(2)

シクロと呼ばれるこの地区はいわゆるスラム街であり、不法な増築を重ねた建築物の密集地帯だった。

過密に連なつた十階建てほどの古びたビル群と、その間を縫う入り組んだ路地とで構成されたシクロは、日中であっても常に薄暗く、絶えず人工的な灯りを必要としている。というのもこの街には太陽の光などほとんど届きはしないのだった。

剥き出しの配管と、電線の束。ビルから突き出た看板やベランダ、ダストシュート代わりに張られたネットの上に溜まつたゴミ。そういった無数の要因が、ビルとビルのわずかな隙間さえも埋め尽くして、遠い空を遮っていた。

溢れ出したゴミから発せられる異臭が、街のそこかしこから漂ってくる。衛生状態も悪ければ治安も悪く、シクロではいたるところで麻薬が平然と売られている。

トワが売りさばくR-129はシクロで最も流通しているドラッグであり、その中毒者たちがトリップしたまま路上で眠りこけている。

トワはラビのあとに続いて、彼女とカナタが暮らしているというアパートへ向かっていた。

カメラを構えてはいるものの、レンズをラビに向けるのみであり、すでにファインダーを覗いてはいなかった。街灯は最低限の光量しか保たれておらず、自らの足元にも気を回さねばならない。

湿ったコンクリートの上を歩いていく。路地の脇にできた水溜りは黒ずみ、油分がうつすらと渦を描いていた。

「その……どうして監視なんてされなきゃいけないんだ？」

「あのひとは少しおかしい」

いくらか躊躇いを覚えつつも疑問のままに問うトワに、ラビは淡々と答えた。

「このビデオだって、ただあのひとが見るだけ。自分の知らないわたしがいること、あのひとには耐えられないから」

「それって病気だろ」

「今更わかりきったことじゃない。カナタがおかしいことなんて、みんな知ってる」

背後からでは彼女の表情は窺い知れない。

ラビはしばらく黙ったまま歩いていたが、不意に振り返ってトワに言う。

「カナタが帰ってくるのは、ちょうどこの街が終わる日だから。わたしたちまだ出会ったばかりなのに、最後の一週間を一緒に過ごすことになるのね」

自嘲気味に言われた言葉に、トワは特に返す言葉も思い浮かばず、苦笑するばかりだった。

彼女の言葉通り、シク口は間もなく取り壊される。

治安の劣悪さと不衛生極まる環境を理由として、政府からの公式な発表がなされたのは、五年ほど前のことだった。

かつては一万人以上もの住民がシク口で暮らしていたが、今ではそのほとんどが街をあとにしている。彼らは政府からの援助金によって、街の外で新たな生活をはじめている。

政府が指定する最終退去期日まで残りわずか一週間であり、その日が来ればすべての住民が強制的に連れ出されることが決定していた。

シク口のこんな細い路地も、以前は窮屈なくらいに人々が行き交い、喧騒に包まれていたが、今ではまるで人気がない。賭博場から

これまでの道中だって、わずか二人ほどの薬物中毒者を見かけるのみだった。

トワはすっかり寂れた街並みを眺めて、それでもなお、街が終わるといふ実感を未だ抱けずにいる。

カナタがシクロに戻るのが最終退去期日と同日であるということ、監視から解放されるなり、自分は街の外へと出て行かなければならないのだろう。だが、どこか他人事のように現実感が湧かない。この時期になっても依然として街に残り続けている人間というのは、一部の取り壊し反対勢力を除けば、ほとんどが現実を直視できない者たちであり、トワ自身そのうちのひとりであると自覚していた。

「もうすぐつくわ。あのアパートよ」

ラビが指差したのは、何の変哲もない灰色の建物だった。

「一階がバーになってるの。もうほとんどお客さんもいないけど。軽いごはんなら作ってくれるから、寄っていかない？ お腹すいたでしよう」

ラビに言われてやっと、トワは自らが空腹であることに気付く。そういえばずっと眠っていたせいで、今日はまともに食事を取っていないのだった。

一日目(3)

ハムとレタスが挿まれただけのサンドイッチがトワの前に運ばれる。一口食べると不味くはないが、特段美味しいということもなかった。カメラはテーブルの上に置いて、レンズをラビの方へと向けてある。

店の照明は橙を濃くしたような、ほとんど赤に近い色をしていた。十ほどあるテーブル席がゆったりと並べられたフロアには、トワたちの他に五、六人ほどの先客がいたが、皆深い眠りについている。R中毒者なのだろう。テーブルの上に突っ伏したり、ソファに横たわったりしながら、思い思いの格好で眠りこけている。

トワは以前に、この界隈にある売春宿で、室内清掃や日用品の買出しなどの雑務を仕事としていたことがあったが、こんな場所にバーがあることは知らなかった。

「材料切らしてるの。普段だったらもう少しマシなもの、作れるのよ」

トワとラビが腰かけたカウンター席の向こうで、少女が無愛想に口を開いた。トワは曖昧に相槌を打つ。

ラビから紹介されたばかりの彼女はミカリという名で、このバーを一人で切り盛りしているのだと言う。以前は別に店主がいたのだが、すでに街を出て行ったらしい。こんな時期ではもっともな話である。

顎のラインで真っ直ぐに切られた黒髪が特徴的な、小柄な少女だった。目鼻立ちははっきりとして整っており、その愛想の無い口調のせいもあって、トワはいかにも気の強そうな印象を受けた。年の頃は十五、六といったところだろう、トワよりもいくらか年下のように思われた。

ミカリはテーブルの上のカメラを視線で指し示して、ラビに問いかける。

「それ、また監視なんでしょう」

不快そうに顔をしかめて、悪趣味、と言い捨てた。トワは、ラビがさつき、監視ははじめてではないのだと言っていたことを思い出す。ミカリはラビの事情を承知しているのだろう。

「カナタ、こんなときにおでかけなの？」

ミカリの言う「こんなとき」というのが「もうすぐ街が終わるとき」を意味しているのは明らかだった。

「そうみたいね」

「……大丈夫なの？ あのひと、おかしなことに巻き込まれてるんじゃない」

ラビはミカリの問いには答えず、ただ「一週間後に戻るらしいわ」とだけ返事をした。ミカリはわざとらしく肩を竦める。それからしばらく沈黙が続いた。

ラビはテーブルの上に視線を落とすままだった。そういえば彼女は飲みものだけで、まだ食事を注文していない。食欲がないのだとしたら、トワを食事に誘ったのは彼への気遣いゆえだろうか。そんなことを考えながらトワがグラスの水を飲み干すと、ミカリが空のグラスに水を注いでくれた。軽く礼を言うと、ミカリが淡々と告げた。

「これで三杯目」

アルコールを頼まなかったのは、未だ引きずるR摂取後の喉の渴きを潤したためだった。酒はあまり強いほうではない。

「あなた中毒者？ Rって、喉が渴くんだって聞くわ」

「中毒ってほどのことじゃない」

「ふうん。まあ、いいけど」

そう言うと、彼女は席を外した。カウンター奥からフロアまで出てくると、R中毒者たちの眠るテーブル席へと向かう。

トワが目で追うと、ミカリはソファに埋もれるように眠る中年男に寄り添った。彼の腕を取り、おもむろにその手首に指先で触れる。脈を取っていた。数秒間そのまま脈を確かめたあとで、次の中毒者の元へと向かう。

奇妙な光景ではあった。テーブルに突っ伏す者や、ソファに横たわる者、床で大の字になっている者、ミカリはそのひとりひとりの脈を取っていく。

彼女はひとりの男の手首に指を当てて、しばらく静かにしていたがやがて手を離し、今度は男の両脇に自分の腕を入れて固定すると、床を引きずってそのままバーの外へと向かおうとする。

あまりに唐突なその行動に面食らうトワに、ミカリは「死んでるから」と告げた。

R-129の副作用によって目覚められなくなった中毒者たちは、やがて身体機能が停止して死に至る。それはこの街で暮らす者にとつて常識的なことだった。

「かわいいそうだけど、仕方がないの」

精一杯の力で、男を外へ連れ出そうとするミカリを見かねて、トワは反射的に手を貸そうと席を立つ。だが、監視対象のラビをひとりにするのも躊躇われて、一瞬足が止まった。ラビはトワの心中を

察したようで、

「逃げないわ。カメラはわたしの前に置いておいて」

あくまで穏やかに告げた。トワは少し迷って、だがラビの言葉に従った。

トワが男の上半身を抱え込み、ミカリが両足を持ち上げる。すでに呼吸の停止した男を運び出す。

中毒者の末路を前にトワは、ひどく無感情な自分自身を感じていた。この男は、自分が売り捌いたRを摂取した者かもしれない。この街のあらゆる場所で死に至る彼らは、近い未来の自分かもしれない。自分で自分を殺すような真似をしながら、それでも実感が湧かなかった。

かつて感じていたはずの痛いほどの現実感はずで消え失せている。麻痺しているのだろう、そんな自覚はあった。間近に迫るこの街の終わりさえ、現実味を失っていく。

店の外へ出る直前、ミカリは不意に一瞬足を止めて、深呼吸した。それからまるで意を決したように、外へと足を踏み出す。いくらか不自然なその様子にトワは違和感を覚えながら、男を路地の隅に寝かせた。

今日、遅くとも明日には政府の見回りが回収していくだろう。腐った異臭に満ちた路地で男を見下ろすトワに、ミカリが小さくため息を吐きながら、戻りましょう、と言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3942w/>

夢から醒める七日間

2011年12月29日10時50分発行